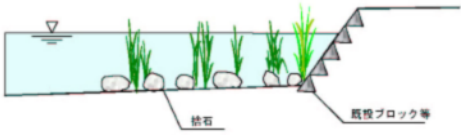
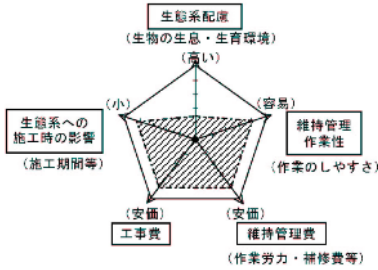


個票5 水際の断面形状の工夫

〔池1(1)③1-1 池2(2)②5-1 池2(2)②15-1 池2(2)③1-1 池2(2)③2-1〕

(2011年作成)

配慮の視点	生態系の多様性への配慮	配慮項目	生き物の生息・生育空間となる多様な自然とそのつながりの保全・創出
	種の多様性への配慮		野生動物の生息・生育環境の保全・創出
配慮事項	エコトーンの重視		
	多様な水辺環境の保全・創出		
	空隙の多い環境の保全		
配慮事例	水域と陸域の接点での多様性の確保		
	工法の工夫による多様な生息・生育環境の創出		
	自然石など自然の材料の使用		
	護岸や根固め工での網柵などを用いた植生護岸や空隙のある材料の使用		
内容	<p>●水際の断面形状の工夫</p> <p>【解説】</p> <p>ため池の水際の断面や工法の設計にあたっては、現況の保全を基本とし、現況の補修や自然材料を用いた工法等について検討する必要があります。その際には、ため池の周囲を同様な断面とするのではなく、部分的に凹凸や曲線を設ける等により断面構造を変えたり、異なった工法を採用するなど、変化のある環境づくりを行う視点が重要です。</p> <p>【具体的な工法・配慮事項】</p> <p>【既存の護岸がある場合の工法例（堤体以外の急斜面の水際）】</p> <p>●捨石工（魚類等配慮タイプ）</p> <p>【工法】 水中に捨石を配置。ヨシ等の抽水植物の植栽は必要に応じて行う。</p> <p>【効果】 捨石やヨシ等の植生により、生物の生息空間（魚類等の産卵場所や避難場所等）を確保することができる。</p> <p>【選定にあたってのポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・捨石に現地での発生材を利用を検討する。 ・捨石工は、泥上げ等の維持管理を考慮して範囲を設定する必要がある。 		
			
			

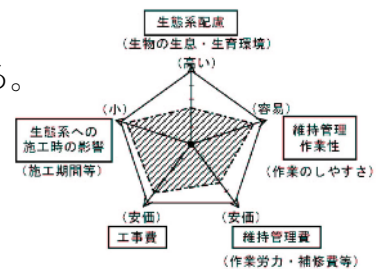
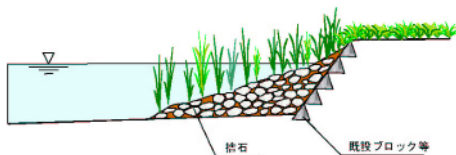
●捨石による緩傾斜護岸工（生態系配慮タイプ）

工法 既設護岸の前面に捨石で緩傾斜をつくり、ヨシ等の群落を形成する工法。

効果 捨石やヨシ等の植生により、生物の生息空間（魚類等の産卵場所や避難場所等）を確保することができる。

選定にあたってのポイント

- ・捨石に現地での発生材（伐採木や間伐材等）の利用を検討する。
- ・傾斜を緩いほど捨石量が多く、工事費が高くなる。
- ・緩傾斜ほど、維持管理の作業はしやすい。
- ・緩傾斜護岸の範囲・傾斜角は、貯水量を考慮する。



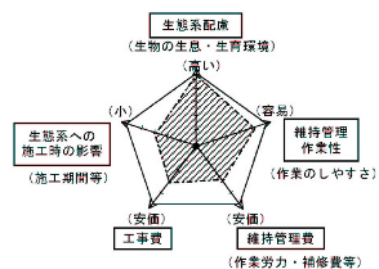
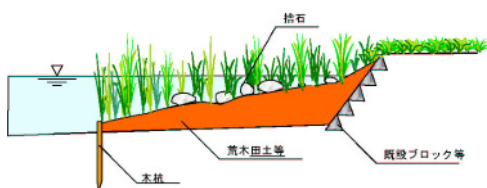
●荒木田等による緩傾斜護岸工（生態系・景観配慮タイプ）

工法 既設護岸部の前面に荒木田などの土で緩傾斜をつくり、捨石や乱杭などで土留し、植栽する工法。

効果 捨石やヨシ等の植生により、生物の生息空間（魚類等の産卵場所や避難場所等）を確保することができる。

選定にあたってのポイント

- ・木杭、捨石に現地での発生材（伐採木や間伐材等）の利用を検討する。
- ・荒木田に浚渫土の利用を検討する。
- ・緩傾斜ほど、維持管理の作業はしやすい。
- ・土の部分が広いほど、植物は繁茂しやすい。
- ・緩傾斜護岸の範囲・傾斜角は、貯水量を考慮する。



【護岸されていない法面の場合の工法例（堤体以外の緩斜面の水際）】

●捨石＋植栽工（生態系配慮タイプ）

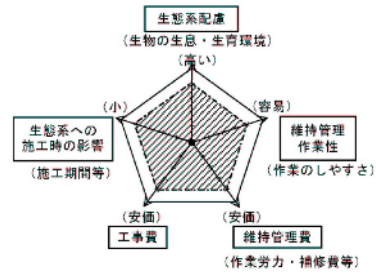
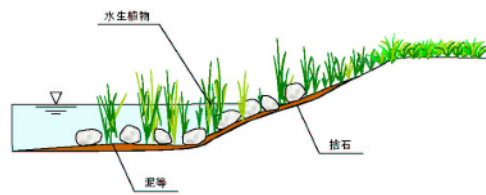
工法 緩傾斜の水際に捨石を配置し、ヨシ等を植栽する。

効果 捨石やヨシ等の植生により、生物の生息空間（魚類等の産卵場所や避難場所等）を確保することができる。

選定にあたってのポイント

- ・捨石や泥に現地での発生材の利用を検討する。

- ・泥上げ等の維持管理を考慮して範囲を設定する必要がある。
- ・緩やかな地形で水位変動が少ないところでは、水生植物等を植栽することを検討する。



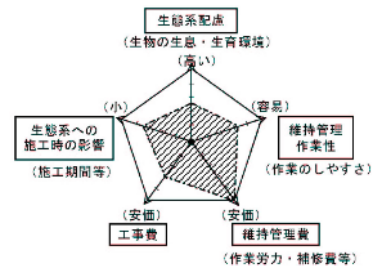
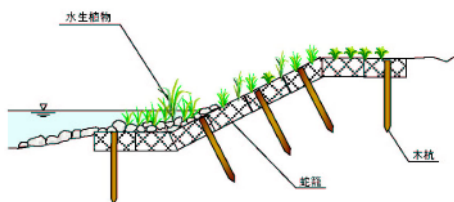
●蛇籠工（生態系・浸食配慮タイプ）

工法 流入部など流れのある場所では、蛇籠により護岸し、捨石や植栽を行う工法。

効果 捨石や植生により、生物の生息空間（魚類等の産卵場所や避難場所等）を確保することができる。

選定にあたってのポイント

- ・蛇籠に詰める自然石や木杭に現地での発生材（伐採木や間伐木等）の利用を検討する。
- ・木杭は、必要に応じて設置する。
- ・蛇籠は、他の工法と比べて、ゴミ拾い等の維持管理作業がしにくい。



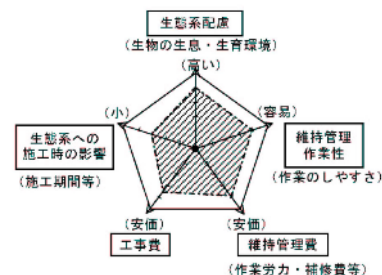
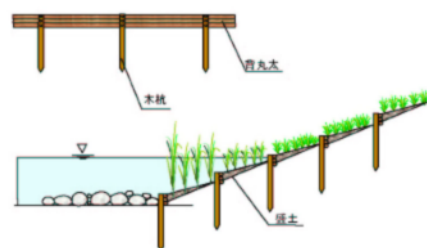
●木柵護岸工（生態系・景観配慮タイプ）

工法 木杭と丸太による木柵の護岸工法であり、木柵の間にヨシ等を植栽する。

効果 木柵間の植生により、生物の生息空間を確保することができる。

選定にあたってのポイント

- ・木杭や丸太に現地での発生材（伐採木や間伐木等）の利用を検討する。
- ・木柵の補修等を検討しておく必要がある。
- ・木材を用いるため、蛇籠工と比べ景観性はよい。



出典：1

【事例】



施工直後



施工数ヶ月後



【場所】

兵庫県加古川市 寺田池

【環境配慮の内容と方法、工法】

- ・堤体の水際に植生護岸を施工

出典：2

参考資料

- 1 「環境との調和に配慮した事業実施のための調査計画・設計の手引き（第2編）」（案）食料・農業・農村政策審議会、農村振興分科会、農業農村整備部会、技術小委員会
- 2 「地域住民とのため池環境配慮の取り組み」兵庫県農政環境部農地整備課・農村環境室・各土地改良事務所